

投稿

《少女時代の回忆》——来自一位归国者三代的手记

少女時代の思い出 三世の手記より

〈父亲的决定〉

1985 年，在我就快要上小学 5 年级前，开始适应了日本生活的姥姥给我们寄来了一封信，问我们一家人要不要也来日本（我姥姥是日本遗华妇人。1980 年，为了照顾在日本的母亲和姐姐返回了日本）。那时，我父亲正在辽宁省一家工厂的指导年轻员工的部门工作。但是，因为有人提出“怎么能让一个母亲是日本人的人站在讲台上教社会主义思想呢？”这样的意见，就被调出了那个部门。

从我父亲记事起，他的绰号就是“小日本”。上中学时，他虽然被选拔为空军飞行员的候补队员，但是却因为母亲是日本人这个理由而不得不中途退出。文化大革命期间，我父亲装作沉默寡言，常常一边感受着来自背后的白眼，一边全身心地投入到喜欢的足球运动中，坚强地忍受住了种种屈辱。然而，就连在工作单位里这种对家庭出身的偏见也还是会毫不遮掩地显露出来。正是因为觉得工作很有意义，所以感受到的打击也就更大了。

父亲做出了决定，带着我们一家人去姥姥居住的日本。到一个语言不通、习惯不同的异国他乡生活绝非易事。但是，考虑到我和妹妹的将来，父亲认为还是去日本比较好。“不想让你们品味爸爸尝受过的这些遗憾”、“希望你们能不断地发现、提升自己的潜力。”这是父亲多次说过的话。站在人生的十字路口时，父亲首先考虑的是作为孩子的我们。为此，父亲舍弃了曾经拥有、打拼的一切，开启了新的人生。对于仅有 12 岁的我来说，父母的心情和想法也已经传达得足够清晰明了了。

〈在日本初次体验的学校生活〉

到日本后，我就被编入了小学五年级，降了两个年级。年龄比同年级的同学都大是件令人很不情愿的事，但是想到不懂日语，只好努力说服自己

〈父の決心〉

1985 年、私が小学 5 年生になる少し前、日本の生活に慣れ始めた祖母から、私たちの家族も日本に来ないかという手紙が届いた（祖母は残留婦人で、1980 年、日本にいる母親と姉の介護のため日本に帰っていた）。その時、父は中国遼寧省で工場の若手社員を指導する部署で働いていた。しかし、「母親が日本人である人間が教壇に立ち社会主義思想を教えるのはどうか」という意見が出され、その部署から外された。

物心ついた頃から、父のあだ名は「小日本」だった。中学生の時、空軍の飛行士候補に選ばれながらも、母親が日本人であるという理由で途中棄権しなければならなかった。文革中は無口を装い、常に背中に白い目を感じながら、好きなサッカーのみに打ち込み、屈辱に耐え抜いた父であった。ところが、職場でもこのように出自に対する偏見が露出したのである。仕事にやりがいを感じただけにショツクは大きかった。

父は、私たちを連れて祖母の住む日本に行く決心をした。言葉や習慣が分からない異国の地で暮らすことはたやすいことではない。しかし、私や妹の将来を思うと、父は日本に行った方が良いと考えた。「あなた達にお父さんのような悔しさを味わってほしくない」「自分の可能性をどんどん見つけて伸ばしてほしい」、これは父が幾度となく言ってきた言葉だ。人生の岐路に立ったとき、私たち子どものことを第一に考え、それまで培ってきたものをゼロに戻して人生の再出発をしたのだった。12歳の私には十分すぎるほど父と母の気持ち伝わってきた。

〈日本で初めての学校生活〉

来日すると、小学校の 5 年に編入した。2 年過年だった。同級生より年上になるのはとても嫌だったが、理解できない日本語のことを思うと、自分を無理やりにでも納得させるしかなかった。鉛筆、消しゴム、鞆、一つ一つ買いそろえなが

接受现实。随着铅笔、橡皮、书包，一个个地买齐，心脏的跳动也变得越来越剧烈了。连“卫生间在哪儿？”这样的日语都说不好的自己，该怎样度过在学校的时间呢？光是想想都觉得惶恐不安。

第一天上学的休息时间，我的桌子旁边聚集了许多同学。大家在说些什么，我也听不懂，不过同学们还是比手画脚地和我说话。我担心的去卫生间的事，也有同学主动告诉我该怎么去。这种状态持续了一段时间。

据一份报告说，出于对“外国来的学生”的新鲜感和好奇心，最初一段时间他们都会被众星捧月般对待。但是，一段时间后，由于语言的障碍、习惯的不同，这些学生就会变得孤立起来这样的事例很多。我也不是例外。过了一个月左右的时间，当我意识到时候，我的周围已经一个人没有了。伴随着下课的铃声，同班同学三三两两地聚在一起开心地有说有笑。侧目看着这一切，我总是犯愁一个人该做些什么好呢。我常常悄悄地从书包里拿出学习日语的课本，假装看书。只是 10 分钟的课间休息，我却觉得很漫长。

为了第二天的准备，我就把黑板上的字一个一个地抄写在联络簿上，回家后和父亲拿着词典查是什么意思。绘画用的颜料、抹布、尺子、粘土、背包……。和中国的学校比起来，日本学校的学习内容更多一些。竖笛、跳箱、使用缝纫机等等，初次体验的事太多太多。对于连读音符都是第一次体验的我来说，很长一段时间每天都觉得紧张，肩膀酸痛。还有音乐教室、体育馆、图画和手工教室……。在适应校园生活之前，我一个人不知道在校园里转来找去多少次。还有最让人难受的事就是和同班同学比无论是身高还是体型都是大号的我不会游泳，但是却不得不下游泳池。郊游、修学旅行，这些都应该是开心的活动，但是只是因为要准备带的东西也会让人变得忧郁消沉，还会为有没有同学愿意和自己一起行动这些事感到担心和紧张。

总是觉得自己的胸口像是被什么东西堵住了。来日本后，一家人一起出去散步的次数减少

ら心臓の鼓動が激しくなっていた。「トイレはどこ？」さえちゃんと日本語で言えない自分が学校でどうやって過ごすのか、考えただけで心細くなった。

初めての登校日の休み時間、私の机の周りにはたくさんのクラスメートが集まってきた。何を言っているのか分からなかったが、皆身ぶり手ぶりで話してくれた。心配していたトイレも



誰かが進んで教えてくれた。しばらくの間、この状態が続いた。

ある報告で、「外国から来た生徒」は珍しさや好奇心から最初は周りからちやほやされがちだが、ある一定期間が過ぎれば、言葉の壁、習慣の違いにより孤立するケースが多いという。私も例外ではなかった。一カ月ほどが過ぎ、私の周りには気が付くと誰もいなくなっていた。チャイムとともに、クラスの皆が三々五々とグループになって楽しそうに話をしたり笑ったりしていた。それを横目に私はいつも一人で何をしたらいいだろうと悩んだ。日本語学習の本をひっそり鞆から取り出して、読むふりもした。たった10分間の休みがとても長く感じられた。

次の日の準備は黒板の文字を一字一字連絡帳に書き移して、家に帰ってから父と辞書を頼りに調べた。絵の具、雑巾、定規、粘土、リュックサック……。中国の学校に比べ日本の学校は学習内容が多い。リコーダー、跳び箱、ミシン等々、初めて経験することが山ほどあり、音符を読むことさえも初体験の私にとって肩が凝る毎日が続いた。それに音楽室、体育館、図工室……。慣れるまで何度も一人で校舎をうろつした。そして一番閉口したのは同級生より年上で背も体型も小さいサイズの自分が泳げないプールに入らなければならないことだった。遠足、修学旅行、楽しいはずのこれらの行事も持ち物で憂鬱になり、一緒に行動してくれる友達がいてくれるかと心配し、緊張した。



いつも自分の胸に何かつまっているような気がした。日本に来てから家族で散歩に出かけることが少なくなったが、数

了，但是那少有的散步时间成了我最放松、安心的时光。我一边走，一边多次做深呼吸，试着看看能不能把堵在胸口里的东西排挤出去。抬头仰望夜空，我也试着向星星许愿“让我早日学会说日语吧。”

一年零四个月，我升入了初中。也会说很多日语了。在当时写的日记里，用满是错误的日文写到“我会竭尽全力好好学习，以后让爸爸妈妈过上舒服的日子。”这也是我向自己发问的“你为什么来日本？”这个问题的回答。

〈父亲的工作变动〉

在我读初三的时候，父亲辞去了工作。那家公司即便对外国人来说也是一个让人感到舒适的工作场所。只要条件允许，父亲就加班加点拼命工作，但是即便如此，菲薄的月薪也无法支付一家人的生活费。为了得到稍微高一些的工资，父亲不得不去找新工作。

然而，工作很难找到。日语说得不好是找工作的障碍。持续一段时间里父亲常常都是日日难眠，连在我的眼中也能看得出父亲是在硬挺着装出一副有精神的样子。我放学回来后都是没工作的父亲在做晚饭。我的心也被绷得紧紧的。

我想以自己的方式帮助父亲。在学校里为数不多的朋友中，有个朋友是可以让我放开胆子说出自己是从中国来的。那个朋友的父亲是一家银行的某个支行的行长。如果给那个朋友讲自己父亲的事或许能给帮个忙什么的吧。我这么期待着并把自己的想法告诉了父亲。

可是，出乎意料的是父亲一点也没高兴。父亲只是用中文说“不要再担心爸爸的事了。全力以赴地做好你自己的事，这才是爸爸最高兴的。”

我猛然觉得一下子就清醒了。我并没有顾及到父亲的感受。我想做的事其实是伤害了作为家长的父亲的自尊心。我凝望着父亲那寂寞的背影，为自己轻率的想法感到生气懊恼。

我把积压在心中的那些令人窒息的沉重的思绪想了又想。来日本后的沮丧、焦虑、自卑……。但是，总是被这些东西束缚住不能动弹，

少ない散歩の時は最も心安らぐ時間であった。私は歩きながら何度も深呼吸をして胸に溜まっているものが吐き出せるか試してみた。夜空を見上げ「日本語が早く話せるように」と星に願ってみたりもした。



1年4か月後、私は中学に進学した。だいぶ日本語が話せるようになっていた。当時の日記帳には間違いだらけの日本語で「精一杯勉強して、将来お父さんとお母さんに楽をさせる」と書いてある。これは「なぜ日本に来たのか」という自分自身への問いかけに対する答えだった。

〈父の転職〉

中学3年の時、父が仕事を辞めてしまった。職場は外国人の父にとっても居心地のよい所だったが、許される限り残業をして懸命に働いても、一家の生活費もまかなえない安月給だった。少し高い賃金を得るためには、新しい仕事を探すしかなかったのだ。



けれど、仕事はなかなか見つからなかった。日本語がうまく話せないことがネックだった。父は眠れない日が続ぎ、私の目にも無理に元気を装っていた。学校から帰ってくると仕事のない父が夕食を作っていた。私の心は締め付けられる思いで一杯になった。

私は自分なりに父を助けようと思った。学校の数少ない友達の中に、自分が中国から来たことを思い切って打ち明けてもいいかなと思う人がいた。父親が銀行の支店長をしていた。この友達に父の事を話したら何とかしてくれるかもしれない。そう期待して父に話してみた。

しかし、予期せぬことに父は少しも喜ばなかった。「父さんの心配はもうしなくていい。自分の事を一生懸命やりなさい。父さんはそれが一番うれしい」と中国語でそれだけ言った。

私ははっと目が覚める思いがした。父の気持ちまで考えていなかった。私がしようとしたことは、親としての自尊心を傷つけることだったのだ。私は父の寂しそうな背中を見つめながら自分の軽率な考えに腹が立った。

私は自分の心の中の息苦しいほどのずしっと重いものを考えた。日本に来てからの苛立ち、焦り、劣等感……。しかし、

一直这样下去行吗？我的脑海中回响起决定来日本时父亲说过的话“不想让你们像爸爸一样。”

一定要尽早掌握日语。这样的话，也就能适应日本的生活了吧。只要我能适应日本的生活，爸爸妈妈也就一定会安心了吧。我在心中坚定地发了誓。此后在书桌旁的的时间变长了。课堂上有不懂的地方，回家后就反复地读课本，重要的地方就记在自己做的复习笔记本上，怎么也无法理解的内容就到学校问老师。

〈高中时代〉

1990 年 4 月我升入了一所公立高中。每天单程要骑 30 分钟自行车去上学的路程并不轻松，但是我的心情很轻松愉快。无论是中国的事还是年龄的事都装在了自己的心中。一想到只要自己不说就可以装成日本人的样子，心里就会觉得终于可以把那个一直压在肩上的重负卸下来了。学习方面也比以前更加努力了，并且也交到了朋友。

高中二年级的时候，我们全家都加入了日本国籍。对于放弃中国国籍我是有抵触的。我也清楚地知道父母并非是很高兴地选择了这条道路的。但是，为了能在日本堂堂正正地生活下去，不再感受那种心虚自卑，我想这或许是最好的方式了。“国籍改变了，但是心中的中国没有变。”我这样说给自己听。

可能是和归化了日本国籍有关吧，我开始觉得应该把自己的出身跟好朋友认真地说一说。的确在证件材料上我已经是真正的日本人了，但是正因如此就更应该说。第一次我想到要把自己的经历告诉给朋友。

放学后，在和那个朋友一起回家的路上，一边走着，一边想如果有喜欢的男孩子，要向他表白的时候，也一定会是这种心情吧，这样想着，我把自己小学 5 年级的秋天从中国来到日本，因为不会说日语经历的那些辛苦告诉了她。“以后我们还能做朋友吗？”我哽咽着问她。“说什么呢？当然了。我们可是一生的朋友呀”，她这么说着，轻轻地拍拍我的后背。虽然只是一个人，能把自己的经历说给朋友听真是很高兴，更高兴

こればかりに囚われていつまでも身動きができないままでいいのだろうか。日本行きを決めた時の父の言葉が蘇った。「父さんのようになってほしくない」

早く日本語を自分のものにしよう。そうすれば、日本にも慣れるだろう。私が日本に慣れれば、父も母も安心するに違いない。私は心の中で強く誓っていた。机に向かう時間が多くなった。授業で分からないところは家に帰って教科書を何度も読み、大切なところは自作の復習ノートに書き留め、どうしても理解できない部分は学校の先生に訊ねたりもした。

〈高校時代〉

1990 年 4 月私は公立高校に入学した。自転車で片道 30 分以上かかる道を毎日通うのは楽ではなかった。しかし気持ちは楽だった。もう中国のことも年齢のことも自分の中にしまっておける。自分が言わなければ日本人のふりができると思うと、ずっと肩にのしかかっていた重荷をやっと下せたような気持ちになった。勉強もそれまで以上に努力した。友達もできた。

高校 2 年生の時、私たち一家は日本に帰化することになった。中国の国籍を捨てることに抵抗はあった。父や母が喜んで選んだ道ではないことも分かっていた。しかし、日本で後ろめたさを感じずに正々堂々と生きていくためには、これが一番いい方法かもしれないと思った。「国籍が変わっても心の中の中国は変わるわけじゃない」と、私は自分に言い聞かせた。

日本国籍に帰化したことと関係があったのだろうか、私は親しい友達にきちんと自分の出自を話すべきだと思うようになった。確かにもう書類上では正真正銘の日本人。しかし、だからこそ話さなければならぬと思った。初めて自分の歴史を友達に伝えたいと思った。

放課後、その友達と一緒に帰りながら、もし好きな男の子がいて告白する時、きっとこのような気持ちだろうな、そう思いながら私は彼女に、自分が小学校 5 年生の秋に中国から日本に来たこと、日本語が話せず苦労したことを話した。「これからも友達でいてくれる？」喉をつまらせながら、私は彼女に聞いてみた。「何を言ってるの？ 当たり前やん。K ちゃんとは一生の友達やで」と、彼女は優しく私の背中をたたいた。



的是能得到理解。就像从体内涌出了一股力量一样，回家的时候就连一直骑的自行车的脚踏板也觉得变轻了。

有一天，我被一位只在上课时见过面的老师叫住了。“N 同学，可以问问你的一些事吗？”。从那天起，我开始和那位老师谈起了各种各样的事。在一边点头一边认真地倾听我说话的那位老师的面前，我就像被魔法点化了一般，说起了自己的事情。在中国的生活、学校的事情、来日本之后的经历。可以这么轻松地说中国的事，这对我自己来说也是一个新发现。

将来，我要当一名老师！在中国时就有的梦想之花再次开放了。

1993 年 2 月，我考上了外地的一所国立大学。

高中毕业典礼那天，我坐立不安难以定下神来。因为，班主任老师提出了一个建议：在最后的班会上能不能在全班同学面前说说自己的经历。我还没有下定决心时最后的班会就已经开始了。班级的同学一个接一个的站到前面讲话，说些告别的话、谈谈自己的抱负什么的……。“那么，最后……”老师在等着我。

我从座位上站起来，然后走到教室的最前面。一看到全班同学的视线，我的脑子变得一片空白。我也想到要是不说就好啦。“我是……”我的声音开始颤抖了。“我是小学 5 年级的时候从中国来到日本的……”说着我的眼泪就流下来了。因为太紧张，讲得太投入，连后来都说了些什么也已经记不清了。“……我想告诉大家的是，无论什么事，只要努力就一定会有结果。”同学们都为我鼓掌。班会结束后，班里的几个同学围了过来，“为什么不早说呢？”“能多听听中国的事儿就好啦！”也有和我一样两眼哭得通红的同学。“对不起啊。”我只得连连道歉，也为没能早些告诉大家这些而感到后悔。

* 作者 NK 女士，现在成为了一名特别支援学校的教员，在以积极的心态面对学生。

たった一人だったけれど友達に自分のことを告白でき、何よりも理解してくれたことはうれしかった。体から力が湧いてくるように、帰るときはいつもの自転車のペダルが軽くなった感じさえした。

ある日、授業でしか面識のない先生に呼び止められた。「N さん、あなたのこといろいろ聞いてもいいかな」。その日から私はその先生と様々な事を話すようになった。頷きながら真剣に私の話^{しんけん}に耳を傾^{かたむ}けてくれる先生を前に、私は魔法にかかったように自分のことを話した。中国の生活や学校のこと、日本に来てからのこと。こんな楽な気持ちで中国の事を話せるのだと自分でも新発見^{しんはっけん}だった。

将来、学校の先生になりたい。中国にいたときからの夢^{ゆめ}が再び花を咲かせた。

1993 年 2 月、私は地方の国立 S 大学に合格した。

高校の卒業式^{そつぎょうしき}の日、私はそわそわして落ち着^{おち}かなかった。なぜなら担任の先生に、最後のホームルームでクラスの皆に自分のルーツ^{たんじん}について話してみてもどうか、と提案^{ていあん}されたからである。決心^{けっしん}がつかないまま最後のホームルームが始まった。クラスメート^{つぎつぎ}が次々前に立って話をした。別れを言ったりこれからの抱負^{ほうふ}を語ったり…。「では最後に…」先生は私を待った。

私は席^{せき}から立ち上がった。そして、教室の一番前へ行った。クラス全員の視線^{しせん}を浴びると頭の中は真っ白^{あたま ましろ}になった。やめておいたほうが楽^{こえ}だったのにと考えた。「私は…」声が震えていた。「小学校の 5 年生の時に中国から日本にきました…」

涙^{なみだ}が流れた。続けて何をいったのかも覚えていないほど緊張^{おぼ}し、夢中で話した。「…私が皆に伝えたいことは、何事も努力^{むちゆう}すれば、必ず結果^{けつこ}がついて来るということです」。皆が拍手^{はくしゅ}をしてくれた。ホームルームが終わると、何人かのクラスメート^{なんにん}がやってきた。「なんでもっと早く言ってくれなかったん？」「中国の話^{まか}をいろいろ聞きたかったのに」。私と同じように目を真っ赤^{あやま}にして泣いてくれた人もいた。「ごめんな」私は謝^{あやま}るしかなかった。そしてもっと早く伝えればよかったと後悔^{こうかい}した。



※筆者の NK さんは現在特別支援学校の教員^{きょういん}となつて、元気に生徒と向き合っている。